

博士学位請求論文

概要書

「一冊の、ささやかな、本」

ヴァルター・ベンヤミン『1900年ごろのベルリンの幼年時代』研究

田邊恵子

本博士学位請求論文は、戦間期ドイツを代表する文筆家ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin 1892-1940年）が執筆した『1900年ごろのベルリンの幼年時代 *Berliner Kindheit um neunzehnhundert*』（1932-38年、以下、『幼年時代』）にたいする包括的研究である。

『幼年時代』は、亡命期のベンヤミンが、主人公・子ども「わたし」の視点を借りて、故郷ベルリンにまつわる多種多様な思い出を描写した幼年期回想作品である。およそ六年間にわたる『幼年時代』生成過程において、ベンヤミンの生前に二種類の手稿、二種類のタイプライター稿、未完のフランス語稿、そしてメモや覚書といった大量の関連資料が成立する。ただしベンヤミンが1938年初夏に脱稿し、1940年のパリ脱出直前まで手元に置いていた完成稿「パリ・タイプライター稿」（以下、「パリ・タイプ稿」）は、彼の死から40年後の1981年になってようやく当地の国立図書館で発見されたため、それまで『幼年時代』の全貌は不明のままであり続けてきた。

このような資料・遺稿をめぐる状況によって、1950年代から現在にいたるまで『幼年時代』は断章からなる未完の作品との先入観のもとで受容されてきた。国内外の先行研究においては、『幼年時代』所収の任意のテキストを取り上げて論じられる傾向が主流であり、2000年代まで包括的な研究がほとんど発表されてこなかったのである。ただし近年の遺稿整理の成果によって、ベンヤミンが『幼年時代』を未完のままにとどめ置こうとしたのではなく、「全30篇のテキスト」から成る「一冊の本」としての完成を志向していたことが明らかとなった。

第二次世界大戦前夜のヨーロッパにおいて、ユダヤ人亡命者であるベンヤミンの出版活動は大幅に制限されており、事実、『幼年時代』は彼の生前に「本」として出版されることはなかった。それにもかかわらずなぜベンヤミンは、1932年の執筆開始当初から念頭に置いていた「一冊の、ささやかな、本 *ein, winziges, Buch*」としての『幼年時代』の完成と出版に執着したのであろうか——筆者が探究する最大の問いはこう集約される。本博士学位請求論文では、テキスト成立史（序：第一章～第二章）、回想＝叙述方法（第一部：第三章～第五章）、主人公「子ども」の特性分析（第二部：第六章～第八章）、「本」というメディ

アの特性（第三部：第九章～第十章）の観点から、この問いに対峙することを試みた。

「序」では、最初に第一章「『幼年時代』へ向けて」において、1960年代から現在にいたるまでのベンヤミン研究史および『幼年時代』の受容の過程を整理した。『幼年時代』もまた属する後期ベンヤミン思想は、『複製技術時代の芸術作品』（1935-36年）や『歴史の概念について』（1939-40年）に顕著なように、ファシズムやその基盤となった大衆のコンフォートミズムな姿勢にたいする痛烈な批判意識に特徴付けられる。しかしながらベンヤミンが『幼年時代』の読者層に「国を追われたドイツ人たち」を据えているにもかかわらず、本作品には直接的な政治的表現はほとんどみあたらないばかりか、むしろ逆にそのような社会的・政治的言説とは無縁にも見える「子ども」の挙措が強調されるのだ。『幼年時代』と、同時期の他作品との比較を通じて、本研究の主要な問いと構成を示した。

第二章「『覚書』から『本』へ：作品成立史および研究史概観」では、1932年夏に成立した準備稿『ベルリン年代記』（以下、『年代記』）からパリ・タイプ稿にいたるまでのテキスト生成過程を、書簡をはじめとした関連資料をもとに詳細に追跡した。特筆すべきは、ベンヤミンが自らの幼年期回想作品を当初「覚書」と呼びその非完結的性質を強調していたものの、1932年秋の時点ですでに「本」としての完成へとコンセプトを変更した点である。『年代記』を換骨奪胎させるかたちで、ベンヤミンは同年秋～冬に「フェリーツィタス手稿」と「シュテファン手稿」を執筆し、習作としての『幼年時代』の体裁を整えた。これら習作をもととして、翌1933年2月には、「全30篇」のテキストが収録された「一冊の本」としての形式をとる暫定的完成稿「ギーセン・タイプライター稿」（以下「ギーセン・タイプ稿」）が成立する。ただしその後ギーセン・タイプ稿は、ベンヤミンが繰り返した加筆修正によって大幅な変更がほどこされることとなり、最終稿であるパリ・タイプ稿とは内容面でも分量面でも趣が大きく異なることが明らかとなった。

以上のテキスト成立史的情報を踏まえて、本研究は、「全30篇」のテキストが収録されたギーセンおよびパリ・タイプ稿の両方を一次資料として扱い、両ヴァージョンの内容異同の分析を通じて『幼年時代』が「一冊の本」として生成する過程を追うものであることを強調した。

第一部「『幼年時代』における回想＝叙述方法」の目的は、ベンヤミンが本作品で発展させた回想方法および叙述戦略を整理したうえで、その特性を明らかにすることである。『幼年時代』では一人称主語「わたし」が一貫して語りを牽引し、またベンヤミン自身の故郷ベルリンが舞台となっていることから、先行研究では「自伝的作品」とジャンル化されてきた。しかしながらベンヤミンはすでに準備稿『年代記』において、時間や出来事の連続的な因果関係および、作者とテキスト内の人物の同一性を前提とする伝統的な自伝と、「変化する、不安定なもの」を扱う自らの回想方法を区別している。そのため、自伝と『幼年

時代』の試みは明確に差異化されなくてはならないのである。

第三章「**「ブルジョワ社会」の終焉と回想方法**」では、最初にパリ・タイプ稿「まえがき」の分析をもとに、『幼年時代』を貫く執筆方法と動機の特徴を整理した。その結果、ベンヤミンの回想方法は、「ブルジョワ階級のある一人の子ども」のなかで保存されている「大都市の経験」すなわち、匿名的な記憶の現前化を志向していることが明らかとなった。その際、主語「わたし」もまた、作者ベンヤミン本人とは切り離された匿名的形象として扱われている。すなわちこの「わたし」という一語において、回想を行う大人と、回想の対象である子どもが混在しているのである。

かかる独自の「わたし」が成立するにあたっては、ベンヤミンが『年代記』を『幼年時代』へと改稿する過程で行った〈削除〉の作業が深く関わっている。つまり、『幼年時代』では手稿からタイプ稿へと稿が改まるにしたがって、個々のエピソードの時系列が曖昧となり、さらにはベンヤミン個人を特定するような情報すなわち、家族や友人たちの名や肖像写真といったモチーフが削除されてゆくのだ。こうした過程において『年代記』で主観的な筆致によって詳細に紹介されていた「青年運動」に関わるエピソードが徹底して削除され、最終的に『幼年時代』では回想の対象が匿名的な「子ども」にのみ限定されるにいたるのである。

第四章「**「研究」としての回想方法**」では、ベンヤミンが自らの方法論を「研究 Forschung」と名付けていることを踏まえて、その思想的射程を分析した。重要なのは『幼年時代』において、マルセル・ブルーストによる「無意志的想起」の手法が発展的解消を遂げる点だ。1920年代から『年代記』にいたるまでのベンヤミンは、ブルースト的な「無意志的想起」を高く評価していた。しかし『幼年時代』では、「偶然的」な着想に基づく「自由」な回想方法が退けられ、逆に「主観を抑制」したうえで記憶の細部へと接近する「意図的」な「研究」としての方法が試みられているのである。

「研究」としての回想方法は、ベルリンの「往来」という身体的挙措によって具象化されている。分析においては、テキスト「ティーアガルテン」における「散歩/遊歩」、そしてテキスト「シュテューグリッツ通りとゲンティーン通りの交差点」で描写される「急行列車」での移動を取り上げた。前者の「散歩/遊歩」が緩慢さ、後者の「列車での移動」がスピード感という異なる速度を伴う運動であるとはいえ、これらは既知の都市空間とは異なる風景を「発見」という点で根本的には共通した目標に向かっていただけと指摘できる。本章の最後には、ベンヤミンの回想方法に決定的な影響を与えた文筆家フランツ・ヘッセルによるエッセイ『ベルリン散歩』（1929年）と『幼年時代』との比較読解を行った。その結果として、ベンヤミンとヘッセルの回想方法は、「故郷にたいする新たなまなざしの獲得」すなわち、「過去の痕跡」の「発見」を目指すものであることが明らかとなった。

以上の分析を踏まえれば、ベンヤミンによる回想＝「研究」とは、あらかじめ構築されていた過去の記憶を、後年の回想者が現在の視点から自己言及的に介入することによって変容させる試みであると定式化できる。

第五章「せむしの小人に出会うために」では、第三章および第四章で解明されたベンヤミンの回想方法の特性を応用し、『幼年時代』の最後の一貫して据え置かれた重要なテキストである「せむしの小人」の読解を行なった。ベンヤミンは、背中に瘤を追うこの形象を「忘却された記憶」の寓意像として捉えている。ただし「せむしの小人」は、「われわれ」の記憶を「横取り」することで保存しているのだという逆説的言説に鑑みれば、回想の営みとは、たゆまぬ研究的な姿勢によって、「忘却＝眠り」のうちにある記憶を「目覚め」させることであると言える。

記憶の「目覚め」がもたらされるには、「せむしの小人」の「ささやき声」になぞらえられる都市における多種多様な「雑音」が重要な契機となる。「雑音」が感受されるためには、回想を行う「われわれ」に内在しつつも、子どもから大人へと成長する過程で失われてしまった「不器用さ」が発揮されなくてはならない。『幼年時代』において、子ども「わたし」の「不器用さ」は、直線的に進行する「忘却」に対抗する力として肯定的に捉えられている。したがって、「不器用さ」を子どもから学びとり、それを過去の回想に応用することこそが、ベンヤミンの目標とする「幼年時代のイメージ」の現前化に繋がるのである。この点において、子どもが主人公として特権化される意義があることを指摘し、第二部への架橋とした。

第二部「主人公「子ども」の諸特性」を貫く目的は、『幼年時代』の主人公「ブルジョワ階級のある一人の子ども」の特性を明らかにすることである。第一部のいくつかの箇所でも、子どもの「不器用さ」に集約される身体的挙措が、大人「わたし」が試みる回想方法に影響を与えていることを指摘したが、以下の第六章、第七章、第八章では『幼年時代』所収テキストに沿ってより詳細にこの形象に考察が加えられることとなる。

第六章「「破壊的」な子ども」では、最初に書評『ドイツ・ファシズムの理論 エルンスト・ユンガー編『戦争と戦士』に寄せて』（1930年）、エッセイ『経験と貧困』（1933年）をはじめとしたテキストをもとに、ベンヤミンの政治的危機意識を整理した。その際重要な概念となるのが、「野蛮」である。「野蛮」とは、ナチスが提示した一元的な神話的世界像であり、対ナチスの言説においてはそれじたいが「政治の野蛮化」と概念化された、肯定的にも否定的にも流布した語彙である。ただしベンヤミンは、こうした当時の「野蛮」の意味内実を換骨奪胎し、「最初から事を起こすため」の「チャンス」であるとして独自の概念化を行っている。

「チャンス」としての「野蛮＝未開の状態」を内在させているのが、子ども「わたし」

である。重要なのは、この形象が日常的に行う様々な「遊び」だ。その舞台となるのが、ベルリンのブルジョワ的室内すなわち「事物世界」である。『幼年時代』における子ども「わたし」が室内の事物に接触する際に特徴的なのは、「不器用」な手つきを伴い、通例の使用方法とは異なる機能や価値をそこから意図せずして引き出している点だ。子どもは「遊び」を通じて、独自の「小さな事物世界」を生み出すのである。

テキスト「熱」「孔雀島とグリーンケ」「字習い積み木箱」を中心とした分析によって、子どもによる「遊び」の効果が、「因果的な記憶の破壊」という問題圏において『歴史の概念について』で結実した歴史叙述論と密接な関係性にあることが認められた。すなわち、『幼年時代』という作品じたいには、ベンヤミン自身の「個人史」を対象とするのではなく、むしろ個人の記憶を複数の「物語」へと押し広げる可能性を秘めているという点で反歴史主義的な志向性があるのだ。

第七章「子どもと言葉」で取り上げられるのは、子ども「わたし」による「擬態」「模倣」の挙措である。一般的に模倣とは、子どもが身近な大人の挙措を模範とすることで社会化する教育的行為とされるが、ベンヤミンはこうした図式を退けている。つまり、言語哲学的テキスト『類似しているものの理論』、『模倣の能力について』、断章「ランプについて」（1933年）によれば、「擬態」「模倣」とは、子どもにのみ「破壊されないままで残存」する「太古」由来の「才能」なのだ。子どもにおいては、文明と自然、人間と動物、現実と空想といった諸々の分節化がまだ生じてはおらず、ベンヤミンはその無差別的感受性に着目しているのである。かかる「才能」が日常的な「遊び」において発現する様子とその効果を、息子シュテファン・ベンヤミンの成長観察記録を端緒として、『幼年時代』所収の「蝶を追う」「色」「かくれんぼ」をはじめとしたテキストの読解によって分析した。その結果として、子どもの「擬態」「模倣」とは、「身振り」において発揮される「想像力」を示していることが明らかとなった。

このような「想像力」は対象との同一化と、対象からの飛躍という双方向的な運動性を伴う。子どもに内在するもっとも重要なこの「才能」は、「謎めいたもの」としての世界の「読解」という挙措においても認められる。子どもによる「読解」は、聞き間違いや読み間違いといった「誤解」をその原理とする。テキスト「ムンメレーレン」で、「誤解」によって「世界の内奥へと続く道」が開示されると言われるように、子どもはその未発達な言語能力によって「謎めいたもの」すなわち、「断片や破片」といった裁断されたかたちでのみ存在する「アレゴリー」的記憶に接近するのだ。

以上の分析によって、『幼年時代』における子ども「わたし」とは、プリミティブな「擬態」や、未成熟な言語能力である「誤解」を発揮することで、社会化および分節化以前の世界へと無意識的かつ無媒介的に遡及し、独自の世界を創出する能力を伴う形象であるこ

とが明らかとなった。

第八章「世界史」との対決」では、テキスト「戦勝記念塔」を主題に据えたうえで、子ども「わたし」と歴史＝集合的記憶との関連性を問うた。ベンヤミンは子ども「わたし」を理念的形象としてとらえてはおらず、この形象の「想像力」を応用することによって当時のナチス支配や因果連関に基づく歴史把握にたいする批判を展開している。ベルリンの戦勝記念塔は、その頂にある「勝利の女神」が象徴するように、普仏戦争勝利後の統一国家としてのドイツ建国を顕彰する機能がある。しかし、子どもはかかる歴史的象徴性を知らないがために、自らの「遊び場」へこの塔の意味内実を変容させるのだ。

このように、既存の言説や世界観を破壊することで変容させ、それらに代替する新たな価値を付与する能力を持つ子どもを、ベンヤミンは「創造者」の姿になぞらえる。当時の「進歩史観」への批判を託した形象として、『歴史の概念について』第九テーゼに登場する「歴史の天使」が挙げられる。しかしこの天使は、暴力的な「進歩」＝「破滅」の過程を見やるのみで、それを中断させることはできない。本第二部を通じて論じてきたことを踏まえば、子どもは、天空で吹き飛ばされてゆく「歴史の天使」に代わって世俗の世界に留まり続け、その「不器用」で前言語的な「遊び」によって、「アレゴリー」として打ち捨てられた記憶を再度「組み合わせる」能力を付与されているのだと言える。『幼年時代』の子ども「わたし」とは、亡命者であるベンヤミンがおのれの危機意識を投影しつつも、それでもなお、その危機じたいを打破するための希望を託した形象であったと結論した。

第三部「一冊の、ささやかな、本」では、これまでの論述を踏まえて「本」という形式に考察を加える。第一部および第二部で明らかとなったように、ベンヤミンは故郷ベルリンの未知なる新たな諸相をテキストに現前化させることで、『幼年時代』を自伝としてではなく、同時代的なメッセージを伝達する「本」として執筆した。読者層として「国を追われたドイツ人たち」すなわち、おのれと同じ立場に置かれた亡命者たちを明確に意図していたことがその証左と言える。ただしすでにエッセイ集『一方通行路』（1927年）において、ベンヤミンは「本」における古典的權威性を否定している。むしろ1930年代の思想で重要視されていたのは写真や映画といった最新テクノロジーであり、きわめて古典的な形式である「本」への回帰はメディアの変動にたいするベンヤミンの意識と矛盾している。以下、第九章と第十章では、この矛盾じたいに向き合うことで、『幼年時代』が「一冊の、ささやかな、本」であるべき意義を追求する。

第九章「家」としての「本」では、最初に『幼年時代』と同時期に執筆され、幸運にも「本」として出版された書簡アンソロジー『ドイツの人びと』（1936年）の読解を試みた。両作品は、通常の歴史叙述では取り上げられることのない「取るに足らない事柄」が回想の対象とされるという点において密接な関連性を持つ。ベンヤミンが『ドイツのひとびと』

を、おのれが造った「ノアの方舟」と呼んだことから、彼が重要視したのは作品を物体として「未来」に残すこと、それ自体であったと指摘できる。

このように来るべき読者に向けられた「本」が成立するにあたっては、方法論としての〈削除〉が重要な役割を担う。テキスト「ムンメレーレン」の両タイプ稿の比較検討によって、削除とは、作品の分量の調節を目的としたものではなく、作者自身がおのれの姿を「隠す」ことで、「国を追われたドイツ人たち」のための代替的・仮想的「居住空間」＝「家」を残すための戦略であることが明らかとなった。ベンヤミンは、作者である自身の「痕跡」を徹底して消すことによって作品に完成をもたらしたのである。

第十章『『幼年時代』の〈運命〉では、ベンヤミンがテキスト「少年の本」で展開した書物観をもとに、1950年代にテオドル・アドルノが主導した『幼年時代』出版作業を含めた、作品の「その後の生」の可能性について考察した。ベンヤミンが重要視したのは、経年劣化によって「手擦れした本」が持つ美である。したがって『幼年時代』という作品もまた、読者の手によってもたらされる老い＝変容の可能性を内在させているのだと言える。

「本」と老いとの関係を考えるにあたって、アドルノによるエッセイ『本好きの妄想あれこれ』（1959年）を援用した。アドルノもまた、「本」の「真正な美」を「傷を被ること」と見定め、かつての友人ベンヤミンと同様の「手擦れした本」への愛着を表明する。この点において、戦後『幼年時代』を出版したアドルノの功績に新たな価値を見出すことができる。1950年にズーアカンプ社から出版されたアドルノ版『幼年時代』は、ベンヤミンの生前に成立した手稿や新聞・雑誌記事を底本として編集されたものであったため、「全30篇からなる一冊の本」という形態とは大きく異なるがゆえに、今日ではベンヤミンの意向を無視したヴァージョンであると否定的に捉えられている。ただし他ならぬベンヤミンが、「手擦れ」によって「本」が変容する過程そのものに価値を見出しており、さらには『本好きの妄想あれこれ』における「死すべきもののみが復活できる」との一節を踏まえるならば、アドルノ版『幼年時代』は、本作品に不完全な「本」というかたちを与えることによって、「復活」＝「その後の生」の道を示したことに意義があると言える。

これまで論じてきたことを総括すれば、「一冊の、ささやかな、本」としての『幼年時代』は、その「ささやかさ」がゆえに変容の可能性を秘めた、来るべき読者のために残された「本」である。「結」では、本博士学位請求論文での到達点を概観することによって、ベンヤミン作品の「その後の生」を研究という手法によって担うべく、筆者自身の今後の研究課題の展望を示した。